九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

万葉植物の様相

永井, 寛
福岡県立八女高等学校教諭

https://doi.org/10.15017/12394

出版情報：語文研究. 1, pp.39-50, 1951-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

万葉植物の様相

永井寛

万葉集は自然の中に埋もれてゐる――もつとも、自然物のかけらさへも含まないものが総歌数の二十％内外を占めてゐるのであるから、文字通りに埋もれてゐるといふわけでもないけれど、とにかく八十％ほどの歌が何らかの意味に於て自然とのかゝはりを持つてゐるのであるから、その自然の性格を追求するといふ事は、万葉の本質に迫る有力な方法の一つであるに違ひない。

この小論では、その「自然」の中の「植物」についてそこばくの考察を試みてみようとするのである――といつても、その「植物」を自然科学的な研究の対象にしようとするのではない、それはそれとして、いふまでもなく重要な基礎的研究ではあるが、こゝに於て問題としようとするのは、万葉の中に生きてゐる表現としての植物――文学の外に於て眺められたものではなく、文学の内側に於て把へなければならないものとしての植物――いはば、「植物」の万葉的な文学性とでもいふべきものなのである。自然物としての植物は、それが単なる自然物として止つてゐる限り、文学の中のものである事はできない、文学の中のものであるためには、濃淡粗密の程度の差はあつても、ともかく作者の心情にかゝはりあるものでなければならぬ。したがつて、万葉の中にあるものとしての「植物」は、主体の外側に冷然と存在するものではなく、表現と同時に――或はもつと正確にいへば、表現以前に既に万葉人の心情の世界に於て、実は「自然」でないあるもの――主観の浸透を受けたあるものとして、ともかく内面化されたものでなければならぬ。こゝに取り上げようとするのは、そのやうな意味に於ける自然――我との関係に於て把へられた植物である。

さて万葉集に於て植物歌と称すべきものは、どれほどあるだらうか。植物歌といふからには、木、草、花、葉等の如く一般的或は部分的名称を含むものをも含めなければなるまいが、こゝではしばらくかういふものを除いて、それと植物の品種を示すものだけをとりあげる事にする。これを、沢瀉、森本両氏の「作者別年代順万葉集」の区分法によつて表示すると次の通りになる。

(1)父母が殿の後の百代草百代いでませ我が来たるまで（四三二六）

に於ける「ももよぐさ」は、「ももよ」といふ同音を導き出すところに普連想物としてのその唯一のはたらきがあるのであつて、これは「つきくさ」や「よもぎ」といふ名称のよく堪へるところではない。この事は、なほ他の場合にもいへる事であつて、名によつてそのはたらきを異にするといふ事、又古代人が我々以上にものの名に執してゐた事などを考へるならば、たとへ植物学的には同一種であらうとも、文学的には異種類のものとして取扱ふ事も許されはしないか。このやうに、主としてその名によつて分類してみるに、百六十七種ほどになる。これを次に表示する。

（表二）

期及び巻		名称による種類	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	13	65%
	二	82	34%
	三	68	27%
	四	87	20%
作者不明の巻	十三	34	55%
	十四	48	56%
	十二	40	49%
	十三	28	43%
	七	41	59%
	十	51	22%
	十六	23	92%
計		167	11%

右の表によつて明らかであるやうに、時代の下るにつれて植物の種類の比率は減少してゐるが、これは取り上げられる

（表一）

期及び巻		植物歌数
作者分明の期	一	20
	二	239
	三	252
	四	428
作者不明の巻	十三	62
	十四	85
	十二	81
	十三	65
	七	69
	十	237
	十六	25
計		1563

註 (1) 右の歌数の中には「あかね」及び「つるばみ」は含まれてゐない。両者とも色の名を示してゐるに過ぎないと見るからである。

註 (2) 右の歌数には重出歌——作者について異説のあるもの、或は一首の中に二種以上の植物が詠みこまれてゐるもの等——が含まれてゐるのであるから、実際の歌数はこれより少いのである。

右の植物歌の中にどれほどの植物の種類があるか、万葉集古義の品物解によれば、草類凡八十六種、竹類凡四種、木類凡六十六種で計凡百五十六種になる。最近までの研究によつて、これを整理するならば、この種類は今少し減ずるかも知れない、しかし、植物の歌の中に於けるはたらきといふ事を考察の対象にする場合には、歌の中に於ける呼称のまゝに分類する方が不都合を生ずる場合が少いやうである。たとへば「ももよぐさ」は、「つきくさ」或は「よもぎ」のいづれかと同一種であるかも知れない。しかし、

植物に偏向の生じた事を示してゐるのである。たとへば、後期的な特色を著しく帶びてゐる「あやめぐさ」、「うのはな」、「うめ」、「さくら」、「たちばな」、「なでしこ」、「はぎ」「ふぢ」、「やなぎ」、「やまぶき」等十種を選んで統計をとつてみると、次の通り前表を裏書するやうな結果を示すのである。

（表三）

期及び卷		後期的植物数	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	0	0
	二	25	10%
	三	104	41%
	四	204	48%
作者不明の卷	十三	6	10%
	十四	8	9%
	十二	3	4%
	十三	2	3%
	七	5	7%
	十	155	65%
	十六	3	12%
計		515	33%

右にあげた植物のうちで「あやめぐさ」、「うめ」、「たちばな」、「はぎ」、「やなぎ」等の歌の中には、「あそび」といふ語を伴なつてゐるものがある事が注意される。この語はとりもなほさず、これらの植物の置かれてゐた場を指し示してゐるものといへよう。但しこれらのものが常に「みやびたる花」（八五二）であつたわけではない。おのおのの期による、或は卷による場の相違のある事はいふまでもない。たとへば第四期の

(2)級離る越の君らと斯くしこそ楊蘰き楽しく遊ばめ（四〇七一）

に於ける「やなぎ」は「あそび」の中にあるものであるが卷十四の

(3)を山田の池の堤に刺す楊成りも成らずも汝と二人はも（三四九二）

に於ては、生活の泥にまみれた「やなぎ」である。

次に視点を転じて、風流物でない自然物、生活の中にあるものとしての植物について調べてみる。但し、こゝに生活といふのは、「あそび」でない生活、風流の外にある生活を指すのであつて、生産採集等に関するものはもとよりの事、衣食住や土俗学的習俗に関するものまでを含めた広い意味の生活の意である。そして、生活物であるか否かは、生活に関連してゐるといふ事をそれと示す語があるか、ないかによつて決定する。即ち、

(4)鴨頭草に衣ぞ染むる君がためまだらの衣摺らむと念ひて（一二五五）

の「つきくさ」は染色に用ひられたものとしての生活物と

するが、

(5)朝露に咲きすさびたる鴨頭草の日たくるなべに消ぬべく念ほゆ（二二八一）

の「つきくさ」はとらないのである。

（表四）

期及び巻		生活物としての植物歌数	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	10	50%
	二	71	30%
	三	50	20%
	四	56	18%
作者不明の巻	十三	21	34%
	十四	35	41%
	十二	36	44%
	十三	26	40%
	七	26	35%
	十	14	6%
	六	13	52%
計		358	23%

この表は、生活の場にあつた植物が、その生活色を拂ひ落して、自然物としての純粋さを次第にあらはにした過程を、或は生活に深くつながるものが姿を沒し、風流韻事のみやびたる対象となつたものが新たに登場して来た事情を物語つてゐるのである。表二、表三に於てもさうであつたやうに、この表に於ても、巻十が他の巻々と鋭く対立し、第三期、第四期と等質の性格を、或はそれ以上に新しい傾向を示してゐる事も注目すべきである。なほ、同じく生活物として取り上げては居ても、次の二首の中に於ける「たまも」は、作者との関係に於て考へられた場合には性質を異にするといはなければならない。

(6)常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれあどか絶えせむ（三三九七）

(7)玉藻刈る海未通女ども見に行かむ船楫もがも浪高くとも（九三六）

即ち、(6)の「たまも」は、みづからの生活の内側にあるものであり、(7)に於ては、傍観者としての作者の外側にある「たまも」である――といふより、むしろ、作者にとつては「玉藻刈る海未通女」自体が眺められる一景物になりきつてゐる。だから、表四の数字は、実は、作者の生活にぢかに密着してゐる生活物としての植物の数を示してゐるのではなく、作者との関係を一応断ちきつて、ともかく生活に関連したものとして把へられた植物の数を示してゐるに過ぎない。もし、これを厳密に作者との関係に於て考へるとするならば、各期各巻相互の間のもつと微妙な関連を把へる事が出来るであらうが、大勢を眺めるためには右の表でもさほどの不都合を生ずる事はあるまいと思ふ。

さて、これまでは、表現といふ事とはかゝはりなく歌の周

辺を撫で廻して来たのであるが、次に、歌の中に於ける植物のはたらきといふ面から眺めてみる事にする。

一体、植物はまづどのやうなものとして歌の中に取り上げられたか。これについて万葉集に先行する記紀歌謡について、瞥見するに、その中に植物の名の詠みこまれてゐるもの約九八首、この植物歌中、植物が譬喩物として用ひられてゐるもの約五三首、植物歌数に対して約五四％の比率を占めて圧倒的に多い。次に抒情の場にあつて抒情的表現を助けるものとしての抒情物が十数パーセントを占めてこれにつぎ、音連想物の如きに至つては僅かに四首ほどしかなく、他は序又は譬喩中に於ける一景物又は単に修飾物として用ひられたものを含んでゐるのである。なほ、愛賞の情の現れてゐるものもあるが、愛賞自体を主題としたものではなく、譬喩或は抒情中に副次的な存在として現れてゐるに過ぎない。それでは万葉集に於ては、どのやうなものとして取りあげられてゐるか、まづ譬喩物について表示すれば次の如くなる。

（表五）

期及び巻		譬喩物歌数	植物歌数に対する％
作者分明の期	一	5	25％
	二	65	27％
	三	57	23％
	四	99	23％
作者不明の巻	十三	29	47％
	十四	41	48％
	十二	41	52％
	十三	32	51％
	七	38	55％
	十	35	15％
	十六	9	36％
計		451	29％

こゝに譬喩物といふのは、普通の全面的な譬喩形式のもの、或は部分的な譬喩形式のものはもとより、枕詞又は序詞形式の中にあつても、その植物が直接に譬喩として用ひられてゐるものを指してゐるのである。「直接に」といふ意味はたとへば、

(8)藤浪の咲ける春野に蔓ふ葛の下よし恋ひば久しくもあらむ（一八九九）

に於て、主意の「下よ」を導き出すものは「葛」であつて「藤」は譬喩式の序詞中のものではあつても直接に主文の意にかゝはるところはない、したがつて「藤」は譬喩物としてはとらず、「葛」だけを取り上げるといふのである。

記紀歌謡中の譬喩物の比率が五四％であつたのに対し、本集の比率が二九％に過ぎないといふ事がまづ注意されなければならない。この平均比率は、作者分明の期に大きく影響されてゐる事はいふまでもない。これに対して作者不明の巻は上代的特色を示してゐる。但し、各巻の比率がそのまゝ時代の新古を指示してゐるといふのではない。たとへば、巻七の五五％といふ記紀歌謡をも越える比率は、巻中に一〇八首を含む譬喩歌の部立があるといふ特殊事情によるのであつて、最も古い巻であるといふ事にはならないのである。しかし、

巻十の十五%は、何としても後代的の特色を示してゐるといはなければなるまい。

時代の下降するにつれて、植物はその生活色を拂拭していつたやうに、それは譬喩性からも解放されて、自然物としての独立性と清純性とを獲得していつたのである。但し、これも、すべてのものがさうであつたといふのではなく、次にあげるやうな二十数種のものは、譬喩物としてのみ用ひられて、それ以上の発展を示す事なしに終つたものである。

●いはねづら（2）●いはつな（2）●うけら（4）●おほねぐさ（2）●かへ（1）●このてがしは（2）●からあね（4）●くそかづら（1）●くれなね（4）●たまかづら（10）●なゆたけ（2）●たはみづら（1）●つた（5）●つづら（2）●つらはり（1）●ところづら（2）●にぎめ（1）●わかめ（1）●ぬなは（1）●ねつこぐさ（1）●はまゆふ（1）●まめ（1）●むぐら（4）●やまたづ（2）●ゆづるは（1）

（註）……（　）の中は歌数を示す

なほ、譬喩としてのみ用ひられてゐるのでないからこゝにあげなかつたけれども、「ぬばたま」の如きに至つては、集中の用例七九のことごとくが全く固定化してしまつたものであり、自然物としては枯死してゐるともいへよう。

次に音連想物としての側から眺めてみよう。音連想物といふのは、その植物の名によつて、それとは意味上の何等のかゝはりのない他のものが連想されてゐる場合、或は稀にものの名の音の中に、意味上無関係な植物が連想されてゐる場合にいふのである。このものは、同音反復式又は懸詞式の枕詞或は序詞の形をとつて多く現れる。

(9)路の辺のいちしの花のいちじろく人皆知りぬ我が恋妻は（二四八〇）

(10)吾背子はいづく行くらむ奥つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ（四三）

次の例に於ては、「あふち」の「あふ」が「逢ふ」に連想されて、「吾妹子に」といふ懸詞式の枕詞を伴なつてゐるのである。

(11)吾妹子にあふちの花は散り過ぎず今咲ける如在りこせぬかも（一九七三）

次の二例に於ては、地名の中に同音の植物が意識されてゐ

るのである。

(12)……御食向ふき（葱）のへの宮を常宮と定め給ひて……（一九六）

(13)……御食向ふあは（粟）ぢの島に直向ふ敏馬の浦の……（九四六）

枕詞及び序詞関係以外のものには次のやうなものがある。

(14)もみぢ葉のにほひは繁し然れども妻なしの木を手折りかざさむ（二一八八）

(15)足柄の箱根の山にあはまきて実とはなれるをあはなくもあやし（三三六四）

(16)押していなといねはつかねど波の穂のいたぶらしもよ昨夜ひとりねて（三五五〇）

(14)は懸詞式、(15)は同音異語反復式、(16)は頭韻反復式になつてゐる。なほ(15)の「あやし」の「あ」は頭韻反復になる。

大体、右にあげたやうなものを音連想の例とみて、集計すると次の通りになる。

（表六）

期及び巻		音連想物歌数	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	2	10%
	二	58	24%
	三	23	10%
	四	39	9%
作者不明の巻	十三	15	24%
	十四	20	24%
	十二	17	21%
	十三	19	29%
	七	4	6%
	十	13	5%
	十六	6	24%
計		216	13%

第二期の二四%といふ比率が作者不明の巻のそれと甚だ相似てゐるといふ事にまづ注意される。しかし、この期の中には人麿歌集中のものが九六首も含まれてゐるのであるから、この集の傾向によつて影響されてゐるといふ事も考へられねばならぬ。こゝろみに音連想物と譬喩物とを別に取り出して計算してみると次のやうな結果になる。

（表七）

	人麿歌集		右を除いた第二期	合計
音連想物	30		28	58
百分率	31%		19%	24%
譬喩物	28		37	65
百分率	29%		25%	27%
植物歌数	96		143	239

この表の示す通りに、人麿歌集は、普連想物の比率の方が譬喩物の比率よりも高いといふ、他の期にも卷にも絶えてみる事の出来ない大きな特色をもつてゐる。前述せる如く、記紀歌謡に於ては、譬喩物の比率が圧倒的で、普連想物の如きは四％に過ぎないのであるが、万葉集に於ては一三％、譬喩物二九％のなかば近くに上昇してゐる。万葉に入つてから、植物が普連想物としても使用されはじめ、それがやがて絶頂に達した時を考へる事が出来るが、人麿歌集はその頂点にあつたものの一つではなからうか。しかし、この傾向の下降はすでに第二期にはじまり、第三期第四期に至つて一層後退する。卷十に於ては、譬喩物の一五％に対してその三分の一の五％となつて更に衰頽してゐる。次に普連想物としてのみ用ひられてゐるものをあげておく。

●いちし（1）●いつしば（3）●うきくさ（1）(?)●おもひぐさ（1）●かづのき（1）●きみ（1）●しりくさ（1）●しきみ（1）●ちちのみ（2）●つぬ（6）●はなかつみ（1）●ももよぐさ（1）●わすれぐさ（5）

以上、譬喩物と普連想物とに用ひられた植物について一瞥したのであるが、このやうな用ひられ方に於ては、植物は未だ抒情の媒材としての従属的地位を脱して居らず、それ自体が抒情の直接の対象となるやうな事はない。特に普連想物として用ひられてゐる場合に於ては、植物の自然物としての姿態は全く問題とはなつて居ず、専らその音のもつ連想性が歌に取り入れられる契機となつてゐるに過ぎぬ。譬喩物にしても、その植物が何等かの人間的なものを全体的に象徴してゐるといふやうなものではなく、感覚的なその一属性に媒介されて歌の中のものとなつてゐるのである。

たとへば、

(17) 人間道の大家が原の伊波為都良引かばぬるぬる吾にな絶えそね（三三七八）

に於ける「ぬるぬる」は、「引く」といふ行為をとほしてとらへられた「伊波為都良」の一感覚に過ぎず、しかも「伊波為都良」の全存在は一にこれに依存してゐるのである。この譬喩物をたよりに作者の生活の場を設定し、東国的な景観を構へる事は出来なくはないが、作者の本意はそれにはなく、「ぬるぬる」なる触感に焦点はあるのである。このやうに譬喩物と雖も、部分的なその一属性によつて抒情面に接触してゐるのであるが、更にいへば、「伊波為都良」によつて「ぬるぬる」なる抒情語が導き出されるといふ事は、矢張り一種の普連想だといへない事はない。勿論、譬喩より主意へのうつりに意味の曲折がないといふところに、普通の普連想

との相違があるけれども、そのうつりを可能ならしめる基盤となるものは音連想に外ならない。このやうに、譬喩物がその根底に譬喩性と同時に音連想性をも持つてゐるといふところに、譬喩物と音連想物との関係を暗示するものがあるが、この事はなほ別の機会に考へたい。

さて、前述のやうな媒材としての譬喩物或は音連想物は、それ自体が目的ではなく、それ以外のものの表現のための媒介物としての意味をもつものに過ぎないのであるが、それが叙景或は愛賞の対象として表現の焦点に座を占めるためには、音連想の如き聽覚性を越えて、視覚の世界のものとならなければならない。次に視覚的対象としての叙景物及び愛賞物についての表を掲げてみよう。

（表八）

期及び巻		叙景物歌数	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	0	0
	二	5	2%
	三	19	8%
	四	12	8%
作者不明の巻	十三	0	0
	十四	0	0
	十二	0	0
	十三	0	0
	七	2	3%
	十	34	14%
	十六	0	0
計		72	5%

（表九）

期及び巻		愛賞物歌数	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	0	0
	二	7	3%
	三	58	23%
	四	88	21%
作者不明の巻	十三	0	0
	十四	0	0
	十一	0	0
	十三	0	0
	七	5	7%
	十	69	29%
	十六	0	
計		227	15%

（表十）

期及び巻		叙景、愛賞計	植物歌数に対する%
作者分明の期	一	0	0
	二	12	5%
	三	77	31%
	四	100	23%
作者不明の巻	十三	0	0
	十四	0	0
	十一	0	0
	十三	0	0
	七	7	10%
	十	103	43%
	十六		
計		299	19%

「表八」の叙景物といふのは、植物が直接に叙景の対象となつてゐるもの、或は叙景歌中の一景物となつてゐるものをとつたのであり、譬喩歌や序詞中の景物とか、相聞歌中の背景的なものとかはとらない。

「表九」の愛賞物といふのは、植物が直接に愛賞の対象として詠じられてゐるものをいつてゐるのであつて、たとへ愛賞のこころが現れてゐるのであつても、相聞的感情と同居してゐるやうなものはとらない。両者とも叙景又は愛賞の純粋な場にあるものだけをとつてゐるのである。

このやうに、叙景物又は愛賞物として分類してゐるものの、実は、その限界は甚だ微妙であつて、あるものが叙景の対象として特に取り上げられるといふ事は、つまりはそれに対する愛賞の念が底にあるといふ事に外ならないのであつて結局はこの区分も便宜的なものになるかも知れぬ。しかしながら、愛賞の念のあらはなるものと、しからざるものとの間には、なほ表現の姿に於ける主観的と客観的との差は感じられるやうに思はれる。たとへば、

(18)見渡せば春日の野辺に霞立ち咲き艶へるは櫻花かも（一八七二）

(19)あしひきの山の間照らす櫻花この春雨に散り去かむかも（一八六四）

に於ける櫻花は、二首ともに、愛賞或は愛惜の心の対象になつてゐる事はいふまでもないが、前者に於ては、そのやうな心が空間的なひろがりをもつ客観的景観自体に具体化されてゐるし、後者に於ては、「あしひきの山の間照らす櫻花」に叙景的なものが感じられるが、それは「この春雨に散り去かむかも」といふ主観的な愛惜の情につゝまれてゐる。なるほど前者にも、「櫻花かも」のあたりになほ純粋に客観的とはいへないやうなものを持つてゐるが、次のやうなものに比較すると矢張り一目として立てていゝやうな表現上の差があると思ふ。

(20)春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山に咲ける櫻の花の見ゆべく（一八八七）

なほ、次のやうな「しぬ」は、直接にそれを対象として詠まれたものではなく、詠鳥中の一景物ではあるが、叙景歌中の景を構成する純粋な景物として叙景物の中に数へてゐるのである。

(21)うち靡く春さり来れば小竹の末に尾羽うち触りて鶯鳴くも（一八三〇）

しかし、

(22)三諸は　人の守る山　本辺は　馬酔木花開き　末辺は　椿花開く　うら麗し山ぞ　泣く兒守る山（三二二二）

に於ける馬酔木や椿は、叙景物としても愛賞物としてもとらない。馬酔木も椿も三諸の一景物には違ひないが、「泣く兒守る山」の三諸には純粋な自然ではない主観的な何物かが

感じられ、隨つて馬醉木や椿にも単なる叙景物でも愛賞物でもない譬喩的な或は神秘的な意味が漂つてゐるとみるからである。

なほ、卷十六の卷頭にある

(23) 春さらば挿頭にせむと我が念ひし櫻の花は散りゆけるかも（三七八六）

は、もと〳〵愛賞歌であつたかも知れないが、このやうに伝説歌の中にあつては、もはや譬喩歌になり終つてゐるのであるから、勿論とるべきではないのである。

右のやうな手続を以て、純粋な叙景物又は愛賞物としてあるものを拾つてみるに、結果は表の示す通りである。まづ、叙景物の表をみるに、総数七十二首、とりやうによつては愛賞物と見られるものもないではないのであるから、まだ少くなるかも知れぬ。自然歌の多い卷七の二首は少いやうであるが、詠花とあるものと、詠草中の「しぬ」はとらず、詠蘿の蘿は愛賞物に入れ、攝津作及び羈旅作中の「松」を詠んだ二首（一一五九・一一八五）だけをとつたのである。

なほ、家持の

(24) わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（四二九一）

に於ける「竹」は、実は叙景物として数へたのであるが、(18)の櫻とも、(21)の小竹とも、その他の一般叙景歌中の景物とも、やゝ質を異にする何物かを持つてゐるやうに感じられる。感覚的な美意識によつて把へられた愛賞物でもない、単純な客観風の叙景物でもない、それらを越えてもつと高いところにある清澄な精神の世界で幽かにゆれる竹の葉ずれである、感覚的な叙景物ではなく、精神の叙景物――象徴物といつた方がいゝかも知れぬ。

表八と表九との限界には、多少の曖昧さも感じられるが、前者の数字は集中各期各卷の客観的な詠風の傾向を大体指示してゐると思ふ。作者分明の期に於では第一期、作者不明の卷に於ては卷十三、十四、十一、十二、十六の各卷に叙景物としてあるものが一首もないといふ事は、これらの期及び卷の中の植物が前述の生活物として、或は譬喩物、音連想物として、又抒情の中の一景物――抒情物としてのみ存在してゐたといふ事、更に又部分的な叙景はあつたにしても、叙景そのものが主題となつてゐなかつたといふ事を示してゐるのである。自然が主題となつたのは、第二期にはじまり、第三期に頂点に達し、第四期には下降してゐる。作者不明の卷に於ては、卷十が顕著にこの傾向を示してゐる。しかしながら、客観的な詠風とはいつても、植物歌に関する限り、自然の中に根元的な生命を、深い精神的な意味を凝視しようとするも

のは殆どなく――家持の前掲の歌にはやゝそれに近いものを感じさせるが――、つまりは感覚的な美意識の中に跼蹐してゐるに過ぎぬ。万葉植物歌の特色は、表九の示す愛賞の世界にあるといへよう。

愛賞物歌数二二七首、叙景物歌数の約三倍である。自然物に対する愛賞の情は、客観的な叙景によつて形象化されるよりも、なまのまゝの感情をむきだしに主観的に表現される方が多かつたといへよう。それが愛賞にとどまつてゐる限り、その方が自然であつたかも知れぬ。なほ、表中には数へてないけれども、自然物に対する愛賞、愛惜の情が、ひろく相聞的な感情と融けあつてゐるやうなものが、かなりな数に上つて発見されるといふ事が注意されねばならぬ。自然物に対する愛賞、愛惜の情が、そのまゝ人間に対する愛慕の世界に流れこんでくる、そこに両者がもともと異質のものではないといふ事を考へさせるものがあるのである。前掲(23)の自然物に対する愛惜を表現したともみられるものが、みまかりし櫻兒に対する哀慟の心を表現するに堪へるものとなつてゐるといふ事も、両者が根底に於ては等質の世界につながるものであるといふ事を思はせるのである。

植物は、譬喩物としても、音連想物としても、媒介的な存在としてではあつたが、やはり抒情の世界につながるものであつた。そのやうな譬喩性を、音連想性を、そして一面に於ては生活臭を拂拭して、ともかく、一応清純な自然物として観照の世界に登場して来たやうではあるが、こゝでもそれは、やはり深く抒情の世界につながるものであつたのである。それは結局抒情物以外の何物でもなかつたし、又、さうある事が抒情詩の中のものとしては当然であつたのであらう。しかし、このやうなさりげない姿の抒情物ではなく、もつとむきだしに抒情の場にあつたものについても考へなければならないし、又、本稿中にも多くの問題を残して、余りにも素描に終つた感があるが、すべて他日を期する事にしたい。